本の紹介

「人新生の『資本論』」は、ポストコロナの手引き書

社会保険労務士　齊藤　学

マルクスの自然科学研究からの視点

２０２０年９月に出版された斎藤幸平著「人新生（ヒトシンセイ）の『資本論』」は、マルクスの著作をつまみ食い程度にしか読んでこなかった私にもその理論が気持ちよく整理されスッキリした気分になれました。その理由は、マルクスが生涯にわたって追及した人間解放の理論は、新ＭＥＧＡ（マルクス・エンゲルス著作全集）による研究と分析が汲み尽され、それを参照してはじめてその全体像がみえてくるからだといえます。たとえばマルクスが晩年に研究していた自然科学分野での抜粋ノートには、化学、鉱物学、地質学、植物学について深い洞察が示されており、後世の人々に伝えたかったテーマの一つでした。しかしこれらは『資本論』には取り込まれていません。もしこれらが資本論第３巻に編成されていたならばマルクスのエコロジー学は、人間と自然の「物質代謝の亀裂」として資本主義の矛盾を暴く要素の一つになっていたと著者は言います。

ここで興味深いのは、マルクスとエンゲルスの自然科学に対する差異です。マルクスの死後、資本論第２、３巻を編集したのは盟友エンゲルスでしたが、彼自身も自然科学の研究分野で『自然の弁証法』を著しております。しかしマルクスとは自然科学についての考えに相違があり、意図的にマルクスの自然科学研究を資本論第３巻に取り入れなかったのではないかと著者は指摘します。（２０１９年に出版した『大洪水の前に―マルクスと惑星の物質代謝』Ｐ３００～Ｐ３０３〈ドイツのドイッチャー記念賞受賞〉）

エンゲルスは「自然において作用する諸力の法則性を認識することによって、自然を人間の意識的な制御のもとにおくことが、『自由の国』への跳躍なのである」として、人間による自然支配の失敗があるとすれば「自然の復讐」が生じるまでとしてエコロジー批判を行っています。一方マルクスは、農化学者リービッヒの「掠奪農業批判を通じて展開した人間と大地の物質代謝の攪乱」という概念を評価していましたが、エンゲルスはこれを採用するまでに至りませんでした。ここは些細なことのように思えますが、著者は「経済学批判とエコロジーを結び付ける人間と自然の物質代謝という視点が欠けた」エンゲルスは、「自然の復讐という静的で、文明論的な指摘にとどまってしまった」というのです。「資本と自然の間で繰り広げられる動的な関係こそが、晩年のマルスクの研究テーマであり」この二人の解釈の相違はその後も引きずられ「必然の国」「自由の国」の解釈の相違にも反映されているといいます。もちろんこのことをもってエンゲルスの偉大な功績が貶められることではありませんが、『資本論』は、マルクスの全理論の上に完璧な体系を持った書物とは断定できない要素があると私には思われました。

新ＭＥＧＡとは、『マルクス・エンゲルス全集』のドイツ語の略称です。第二次大戦直後から各国のマルクス研究者たちが国際的な連携を保ちながら、マルクス、エンゲルスが残したすべての著作、手紙、メモ、草稿、抜粋を共同で、掘り起こし分析・研究して刊行した歴史的全集を指します。ちなみにわが国では、１９５１年から大月出版から刊行された「マルクス・エンゲルス著作集（ＭＥＷ）」がありますが、これとは区別されます。詳しくは新ＭＥＧＡの日本編集委員会代表で２０１９年に亡くなられた大谷禎之介氏（法政大学名誉教授）の『マルクス抜粋ノートからマルクスを読む』（桜井書店）にその内容が紹介されています。斎藤幸平氏は、この日本ＭＥＧＡ編集委員会の全国メンバー（１２名）の若き研究者の一員として活動してきました。

マルクスは最晩年「脱成長のコミュニズム」を目指した

では、私が本書で目からウロコを落ちる思いをしたいくつかのテーマを紹介していきます。

まず最晩年のマルクスは、「脱成長のコミュニズム」を目指していたという箇所を読んだときは度肝を抜かれました。それも「潤沢な脱成長」というから驚きです。若い頃の私のマルクス理解では、高度に発達した生産手段・生産力がなければ高度な社会主義・共産主義は維持できないと思っておりました。当時、進歩史観を批判した市井三郎の『歴史の進歩とはなにか』（岩波新書）を読んでも素直に受け入れることはありませんでした。スターリン的マルクス・レーニン主義が私の頭に深く刷り込まれていたのです。本書でも最晩年のマルクスは、『ザスーリチ宛の手紙』で「資本主義がもたらすものは、コミュニズムに向けた進歩ではない」と進歩史観を批判しています。

本書に脱成長論の肝である表がしめされ、マルクスの「目指していたもの」としての年代別に区分けがされています。文章で表記します。

①１８４０年代～１８６０年代、生産力至上主義：『共産党宣言』『インド評価』。ここは経済成長を求めるが、持続可能性は低い。

②１８６０年代、エコ社会主義：『資本論第一巻』。経済成長を求め、持続可能性もあるとしていた。

③１８７０年代～１８８０年代。脱成長コミュニズム：『ゴータ綱領批判』『ザスーリチへの手紙』。経済成長を求めず（脱成長）、持続可能性がある。

これがなぜ肝かといえば、いま世界では温暖化による気候変動・自然災害、環境汚染の対策としてグリーン・ニューディールが脚光を浴び、プラネタリー・バウンド（地球の限界値を決めてこの範囲であれば地球システム回復可能という概念）やＳＤＧs（持続可能な開発目標）で切り抜けようとしています。ざっくり言えば、これは経済成長をさせながら地球環境も維持して行こうとする政策（気候ケインズ主義）です。ちょうど「Go to キャンペーン」と「感染防疫対策」を同時に行った２０２０年の日本と似ています。つまりこの方向性は、②の段階まで進めようとすることですが、残念ながら現時点の地球環境は、そのような悠長な対策では手が打てないところまできているというのです。現に２０２０年は観測史上地球表面温度が２番目に高い年となりました。いわゆるポイント・オブ・ノーリターン（以前の状態にもどれなくなる時点）は、急速に迫っているといいます。だからマルクスが死の直前まで研究していた③の段階まで私たちは早急に駒を進めなければならないと著者は力説するのです。

余談ですが、前述したとおり著者は『大洪水の前に―マルクスと惑星の物質代謝』を出版し、ここではマルクスの理論を体系的、包

括的に捉えてエコロジカルな資本主義批判を行っています。しかし著者は１年前に出したこの本については、「環境主義者のマルクス」論を展開しており、この時点で「生産力至上主義という巨大な遺産が重くのしかかって」「エコ社会主義」の段階にとどまっていたと自己反省をしています。１年前に上梓した自らの本の未熟さを反省し直ちに改める態度に私は学者としての誠実さを感じました。

思想を発展させたといえば、似たような話が本書のトマ・ピケティに言及した箇所にも出てきます。２０１４年に世界的に大ブレイクした『２１世紀の資本』を著したトマ・ピケティは、当時、「マルクスは難し過ぎて読んでいない」と公言し、旧ソ連を「労働者の労働の成果を官僚が奪い取る社会」であると社会主義批判をしていました。これに対しては、ソ連は本当は社会主義ではなかったと反論しても始まらないところですが、そのピケティが社会主義者に「転向」したというのです。２０１９年の彼の著作『資本とイデオロギー』では、社会民主主義政党を批判して「参加型社会主義」を要求しておりマルクスのいう「持続可能な社会へ転換しようと試み」ているとのことです。これにもビックリでしたが、ピケティも実は密かにマルクスを読み始めていたのではないかと思います（笑）。

逆に批判のやり玉に挙げられたのが、公正な資本主義社会を実現するためには、労働者の賃上げ、富裕層、大企業への課税、独禁法の強化を提唱しているノーベル経済学者Ｊ・スティグリッツです。スティグリッツについては、「より公正な未来のビジョンを『正しい資本主義』として、既存の『にせの資本主義』に対置しているが、彼が憧憬を抱く、戦後から１９７０年代までの黄金期の方が、むしろ例外的な『にせの資本主義』だったのではないか。そして、スティグリッツが指弾する現在の『にせの資本主義』こそが、実は、資本主義の真の姿なのである」とスロヴェニアの哲学者、スラヴォオイ・ジジュクの言葉を借りて手厳しい批判をしています。やはりスティグリッツに資本主義を超える理論を期待することはできないのでしょう。

余談が続きますが、わが国にも市場と工業（農業を捨象した）を前提とした狭義の経済学を超え、生命系、農業・自然の摂理も取り入れる広義の経済学を考えていた玉野井芳郎のような学者もいます。宇野学派の一人ですが代表的著作『エコノミーとエコロジー』は、生態系にエントロピーや熱力学第二法則まで引用してまさに宇宙まで視野にいれた考察で、私も共感と刺激を受け今でも時々読み返しています。玉野井は、１９７０年代にすでに同じような視点で、人間の掠奪行為が自然との物質代謝に亀裂を生むと認識しておりましたが、マルクスについては、生産力概念を工業中心とする世界と捉えておりました。１９８５年に亡くなった玉野井ですが、もし新ＭＥＧＡ第４部門で真のマルクスを読んでいたら本書と同じ結論に達し「新・エコノミーとエコロジー」論を書いていたのではないかと思います。

本書はこのように、はじめから終わりまで資本の搾取対象となる「人間労働力」と「地球環境」の二つのテーマに沿って論じられ、同時に後述するように読者に行動も促しています。たしかに社会変革をする前に大洪水や大規模災害で地球全土が取返しのつかない状況になってしまっては身も蓋もありません。

「使用価値を重視する社会に移行しなければならない」

次に「使用価値を重視する社会に移行しなければならない」と本書は指摘します。『資本論』といえば、商品の分析からはじまり価値形態論が展開され、商品は価値と使用価値の対立する統一物として「貨幣」「資本」へと分析されていきますが、本書は、従来の解説書とは違い別の切り口を提示します。これには

私も暗闇で道に迷っていたところに光を当てて道順までも教えてくれたような気がしました。

資本論の冒頭マルクスは、「資本主義的生産様式の諸社会の富は、『商品の巨大な集まり』として現れる」と書き出しますが、以前、当「金融・労働研究ネットワーク」代表・高田太久吉中央大学名誉教授は、マルクスは資本論でこの「富」については、その概念を明らかにしていないと問うていました。本書を読んでからこの言葉を思い返していたのですが、たしかに高田先生の疑問は鋭い指摘です。「富」は、「私財」と「公富」に分けられます。

私が読み取ったのは、ちょっと短絡的ですが「財」＝価値、「富」＝使用価値という図式です。「財」は、普遍的なものではなく商品が全面的になった資本主義社会においてのみ捉えられる概念であり、「富」は人間生活において必要で役に立ち、どの時代にも共通するもの、人間労働の普遍性をもったものとして捉えました。また、この場合の使用価値は公共性を帯びています。本書では「コモン」と呼び「社会的に人々に共有され、管理されるべき富のこと」で「公富」と述べています。

たとえば経済市場自由主義者のハイエク等を批判していたカール・ポランニーの「市場を社会に埋め戻す」という意味もコモンの概念を応用すれば理解することができます。マルクスによると商品は共同体の果てるところで（市場）商品交換が発生するといいますが、商品経済（資本主義）と市場は切ってもきれない関係にあります。市場取引の多くは「私財」の交換であり「公富」ではありません。だとするならば、政党選挙および民主的運動の連帯で「公富」であるコモンの再生を法的にも制度的にも実現することは、相対的に「私財＝商品」が交換される市場取引を縮小させる（埋め戻す）ことに繋がるのではないかと考えました。

「コモン」の詳細について本書では、新古典派経済学の市場批判をして「社会的費用を基本的人権」に等値させた故・宇沢弘文の「社会的共通資本」を引き合いに出しています。私見ですが、都留文科大学名誉教授・後藤道夫先生たちが提唱している持続可能な地域社会と経済を重視する「新福祉国家論」の現物給付の公共システムも「コモン」に繋がるのではないかと思います。（国家論、税制は、議論の余地があります）

具体的には、自然環境（山、川、森林、海洋など）、社会的インフラ（道路、橋、鉄道、水力、電気、ガス、通信、インターネットなど）、公共資本（教育、医療、介護、司法、文化など）を指します。ここで重要なことは、これらの管理運営を専門家に任せるのではなく「市民的・水平的に共同管理」をすることだといいます。つまり、コモンとは①社会的富（公富）と②それを管理する共同体の二つを表す概念です。資本主義で失われたコモンをまた復活させ、再建される（否定の否定）社会全体をマルクスは、アソシエーションと呼んでいます。これを「民主的社会主義革命」と呼んでもいいのではないでしょうか。

新自由主義の弊害と破たんを露わにしたコロナ・パンデミック

世界的に１９８０年代からはじまった新自由主義によって公共部門（公富）の割合は民間部門（私財＝商品）に比して小さくなりました。人間が生存していくために必要な使用価値が縮小し、不要な商品＝価値＝擬制資本が金融化と相まって、増大しているのが現代社会です。

そして新自由主義の弊害と破たんが露わになったのが、今回のコロナ・パンデミックでした。新自由主義は、社会のあらゆる規制を緩和して民間部門が行う業務を拡張し、市場にすべてを委ねるものです。米国はレーガノミクス、英国はサッチャーリズム、日本では臨調による行政改革が強行されました。実際に行われたのは、鉄道、郵便、電話・通信事業

の民営化と医療、福祉、年金、介護などの生活に関わる公的部門の財政の縮小そして軍事費の増大でした。

今回のような感染症に対応する医療、福祉の現場は、コロナ前からすでに疲弊しており、そこにパンデミックが襲いかかりすべての国で混乱と医療が破たんし多くの命が奪われました。まさに「公富」が奪われ、「私財＝商品」が拡張された続けた結果なのです。

マルクスの言葉で言えば「価値と使用価値の対立」であり、本書では「その結果、『使用価値』は『価値』を実現するための手段に貶められていく。『使用価値』の生産とそれによる人間の欲求の充足は、資本主義以前の社会においては、経済活動の目的そのものであったにもかかわらず、その地位を奪われたのだ」と指摘します。

労働部門からみると、今回コロナによって、①使用価値＝数値化できない労働（医療、介護、福祉分野）エッセンシャル・ジョブ（人間の手を必要とするケア労働）と②すべてを価値に数値化される労働のブルシット・ジョブ（クソくだらない仕事）の差異が見事に炙りだされました。（これは社会科学上の区分ですので、くれぐれも金融労働者は、「おれたちの仕事はクソくだらないのか」と嘆き悲しまないでください）

現実はこのような状況ですが、もし前述した「公富」が多くの人々に平等に無償化されていたとすると、たしかに平和で安穏な暮らしが保障され、パンデミックにも被害を最小限に食い止めることはできただろうと想像はつきます。これは私見ですが、そんな時代は人間そのものが「価値（使用価値ではない）に価値」を見出せなくなり過剰な欲望はしなくなるのではないかと思います。（これも議論の余地があり）

繰り返される「本源的蓄積」
=共有財産の私的所有への転嫁

さて本書では「本源的蓄積」の「希少性」が、資本の価値増殖を作り出す手段として繰り返し行われることを述べています。私が学んだ本源的蓄積とは、代表的な出来事として英国で「囲い込み（エンクロージャー）」によって、共有地を追われた農民の一部（ヨーマンリー）が都市に流入し、労働者階級となりその労働力は剰余価値の源となり、消費者としては資本の循環を支える主体となったと理解していました。つまり資本主義はその始まりから農民たちを土地から根こそぎ暴力的に剥奪する歴史上、一度きりのものと認識しておりました。しかしこれも間違った捉え方でした。もっとも、昨年読んだ白井聡氏の『武器としての資本論』にはすでに、「・・・（本源的蓄積は）形をかえながら幾度となく繰り返されてきたのではないかと考えています」と書いてありました（同書Ｐ１７３）。さすが白井先生洞察力が鋭い。

いま中国が利潤を求めてアフリカ大陸に進出すること。安い労働力を求めて日本企業がアジアに進出したこと。派遣労働者・非正規労働者を増加させたこと。次つぎに機種変更をしていく携帯電話など、数えきれないほど資本は「希少性」を使って利潤を獲得しています。

また本源的蓄積論は、未来社会論にも関わる内容をもちます。なぜ「脱成長」が「潤沢」なのか、という疑問です。本書は「囲い込みの過程を『潤沢さ』と『希少性』という視点からとらえ返した」といいます。資本主義以前は、誰もが平等に「潤沢」に使用できていた山、川、土地、成果物などの共有財産が、「囲い込み」で私的所有になり「希少性」が生じて利潤を生むことができるようになります。階級と格差の始まりです。まさに資本主義的私的生産様式の原形がここに認められるのです。だとすれば（繰り返しになりますが）、弁証法の「否定の否定」により、失われた「共有財産」と「共同体」のコモンを取り戻す（再生する）ことは、すなわち、時代を経てさらに「潤沢」

になった「公富」をコミュニズムで取り戻すということになります。こう読むことで、私には、いままでバラバラであった糸がいっぺんに結び付いたように思いました。自分がいい加減で、生半可なマルクス読みをしていたかもよく分かりました。

本書は理論のみならず、読者に行動も呼びかけています。「ハーヴァード大学の政治学者エリカ･チェノウェスらの研究によると、『３．５％』の人々が非暴力的な方法で、本気で立ち上がると、社会が大きく変わる」といいます。たとえば１９８６年のフィリピンの「ピープルパワー革命」、２００３年のグルジアの「バラ革命」は市民不服従がもたらした社会変革であり、ウォール街占拠運動、バルセロナの座り込みも少人数からはじまっていると言います。今も世界のいたるところで、民主化運動を進めている人々には、大変勇気を与えてくれる分析です。香港の民主化活動家たちに心を寄せたくなる文章です。

さて最後に本書の文を引いてまとめとします。

「資本主義が引き起こしている問題を、資本主義という根本原因を温存したままで、解決することなどできない。解決の道を切り拓くには、気候変動の原因である資本主義そのものを徹底的に批判する必要がある。しかも、希少性を生み出しながら利潤獲得を行う資本主義こそが、私たちの生活に欠乏をもたらしている。資本主義によって解体されたしまった〈コモン〉を再建する脱成長コミュニズムの方が、より人間的で、潤沢な暮らしを可能にしてくれるはずだ」と。

以上、本書の紹介がダラダラとまとまりのない論評になりましたことは、ご容赦ください。ただ、このように若きマルクス学者が「ボーっと生きていた」私にガッツンと刺激を与え励ましてくれたことに感謝し、この本を多くの人々が実際に手に取って読み、地球と自然すべての生物を救おうと行動を起こす日が必ず来ることを確信して結びとします。

以上

（「人新世の『資本論』」齊藤幸平著　集英社新書　1020円＋税）